

桶狭間合戦

道三時代の美濃と隣国



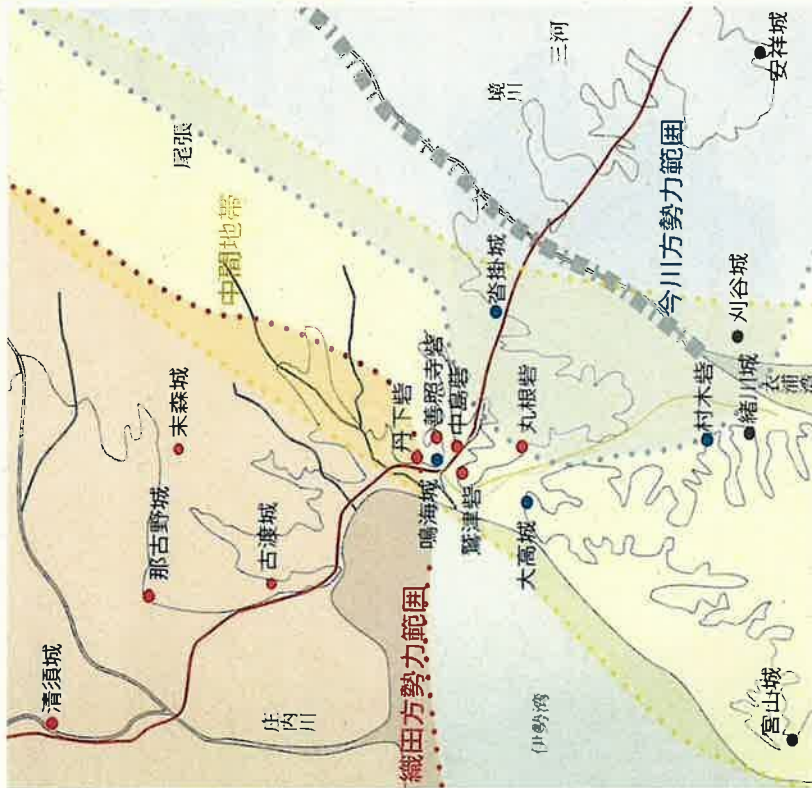
『週刊 新説 戦乱の日本史 美濃国盗り物語』(小学館 2008年)より



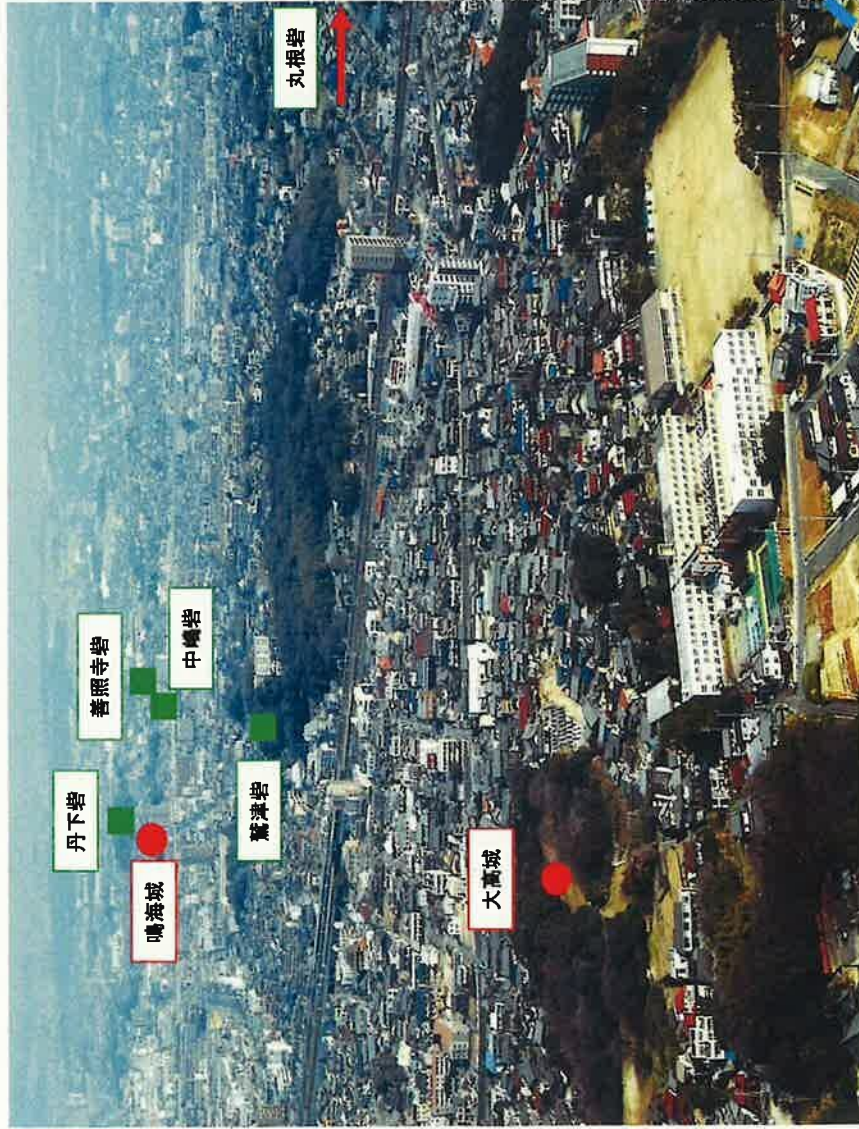
鳴海城跡 名古屋市長区鳴海町城



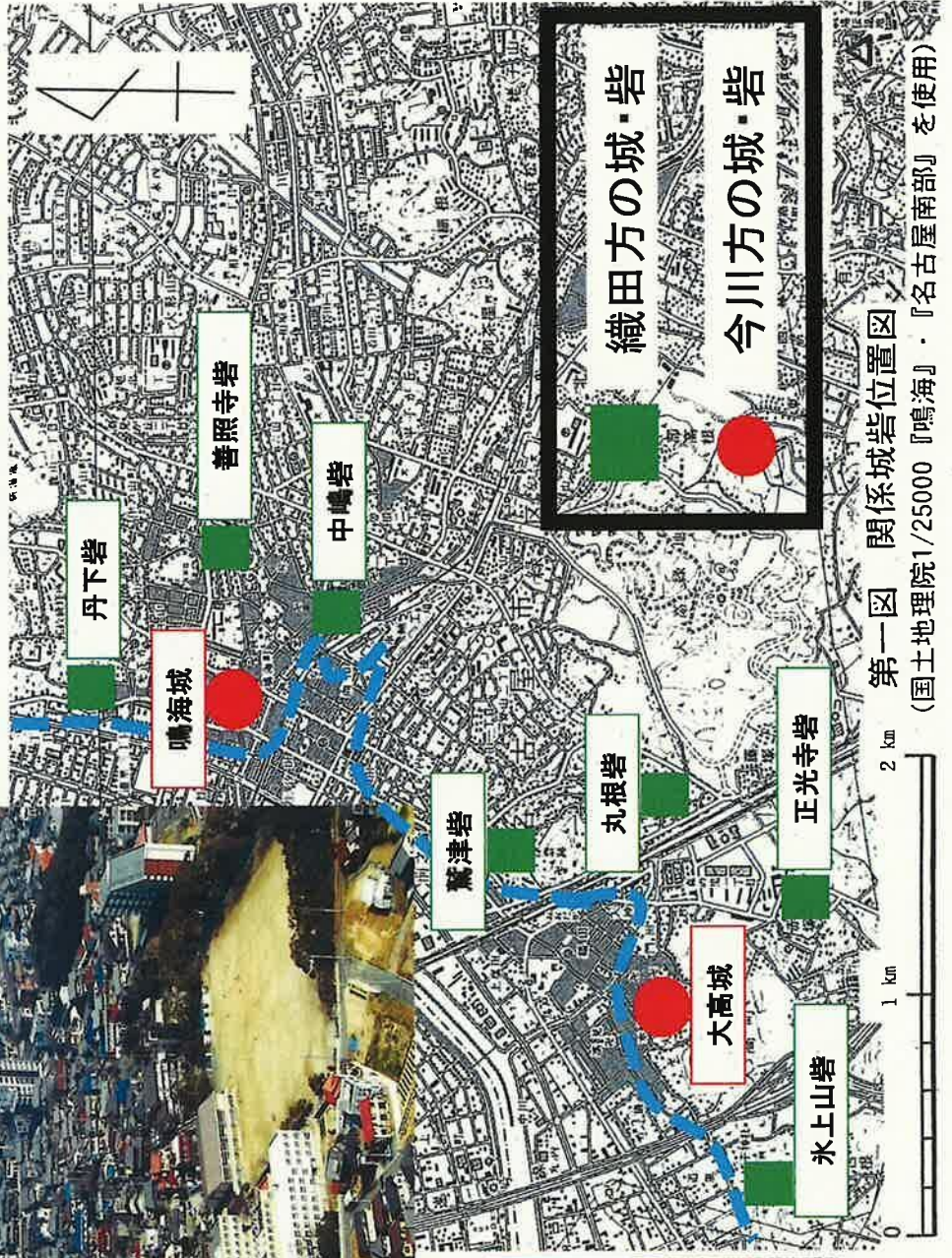
国史跡 大高城跡 名古屋市長区大高町城山



戦国時代の尾張国・桶狭間合戦直前の勢力圏
『城からのぞむ 尾張の戦国時代』(名古屋博物館 2007年)



善照寺砦跡 名古屋市緑区鳴海町砦



織田方の城・砦
今川方の城・砦

第一図 関係城砦位置図 (国土地理院1/25000『鳴海』・『名古屋南部』を使用)



国史跡 丸根砦跡 名古屋市緑区大高町丸根

例 天文廿一年壬子五月十七日

一、今川義元將懸へ參陣。十八日夜に入り、大高の城へ兵糧入れ、明けなき様に、十九日朝暈の満ちを勸がへ、取出を払ふべき旨必定と相聞え候の由、十八日夕日に及んで佐久間大守・織田玄蕃かたより御注進申上候處、其夜の御はなし、軍の行は努々これなく、色色世間の御難談迄にて、既に深更に及ぶの間婦老候へと御暇下さる。家老の衆申す由、運の末には御懸の貌も曇るとは此節なりと、各々陣候て飛帰へられ候。案のごとく夜明けがたに、佐久間大守・織田玄蕃かたより早湯津山・丸根山へ人取かけ候由、追々御注進これあり。此時、信長攻盛の舞を遊はし候。人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり。一度生を得て滅せぬ者のあるべきか、と候て、柳の枝、具足よこせよと仰せられ、御物具めされ、たちながら御食をまいり、御甲をぬき候て御出陣なさる。其時の御件には御小姓衆、岩室守門守・長谷川橋介・佐脇藤八・山口飛弾守・賀藤弥三郎、是等主従六騎、あつた迄三里二時にかけさせられ、辰刻に源太夫殿宮のまへより東を御覧じ候へば、湯津・丸根落去と覺しくて、塵上り候。此時馬上六騎、雜兵武官ばかりなり。浜手より御出で候へば、程近く候へども塩瀬をさし入り、御馬の通ひこれなく、熱田よりかみ道をもみにもんで懸けさせられ、先だんげの御取出へ御出で候て、井ノ口源三郎佐久間信朝の取出へ御出であり、御人数立てられ、敵衆捕へさせられ、旗幟御覽じ、御懸今川義元は四万五千引掛し、おけはさま山に人馬の息を休めこ

れあり。天文廿一年五月十九日午刻、因次に向て人馬を御へ、湯津・丸根攻落し、満足これに過ぐべからず、の由候て、懸を三番うたはせられたる由候。今度家康は未武者にて先懸をさせられ、大高へ兵糧入れ、湯津・丸根にて手を砕き、御辛勞なされたるに依て、人馬の息を休め、大高に居陣なり。

信長兼照寺へ御出でを見申し、信々集人正・千秋四郎二重、人数三百ばかりにて義元へ向て足輕に罷出で候へば、喧と入り来て、下にて千秋四郎・佐々集人正初めとして五十騎ばかり討死候。是を具て、義元が表告には天降鬼神と恐べからず、心地はよしと候て、敵々として懸をうたはせ陣を居られ候。

信長御覽じて、中嶋へ御移り候はんと候つるを、脇は深田の足入、一騎打ちの道なり。無勢の様敵方よりさだかに相見え候。御勿体なきの由、家老の衆御馬の轡の引手に取付き候て、声々に申され候へども、ふり切つて中嶋へ御移り候。此時二千に足らざる御人数の由申候。中嶋より又御人数出だされ候。今度は無理にすぎり付き、止め申され候へども、爰にての御談には、各よく承り候へ。あ

の武者、皆に兵糧つかひて夜もすがら来り、大高へ兵糧入れ、湯津・丸根にて手を砕き、辛勞してつかれたる武者なり。こなたは新

手なり。其上小軍ニシテ大敵ヲ怖ル、コト莫カレ、連ハ天ニ在リ、此語は知らざる語。懸らばひげ、しりぞかは引付くべし。是非に懸

神の神算かと申候なり。御懸るを御懸し、信長懸をおつ取て大高、懸を上げて、すはかこれくと仰せられ、黒煙立てし懸を見て、水をまくるがごとく後ろへくはつと崩れたり。弓・鎧・鉄砲・のほり、さし物、算を乱すに異ならず。

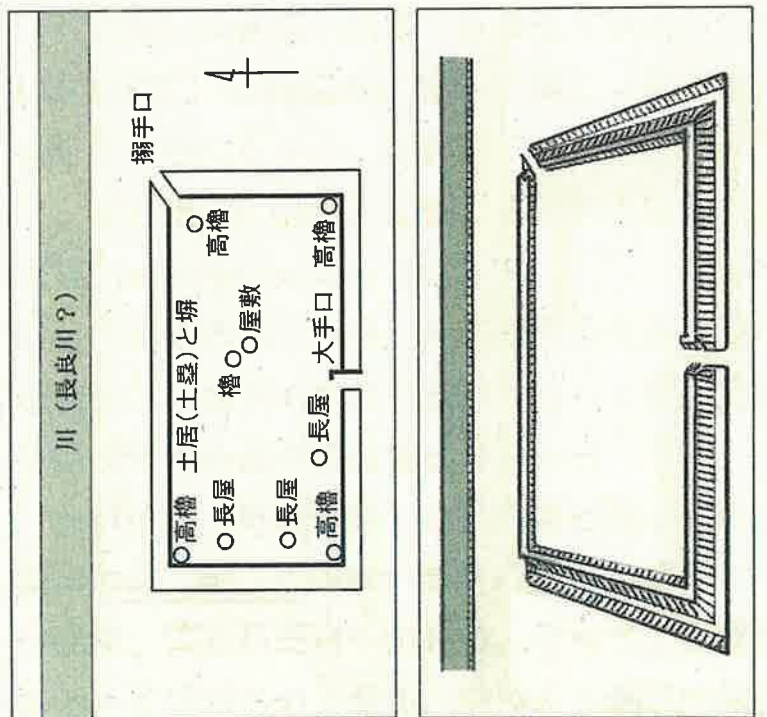
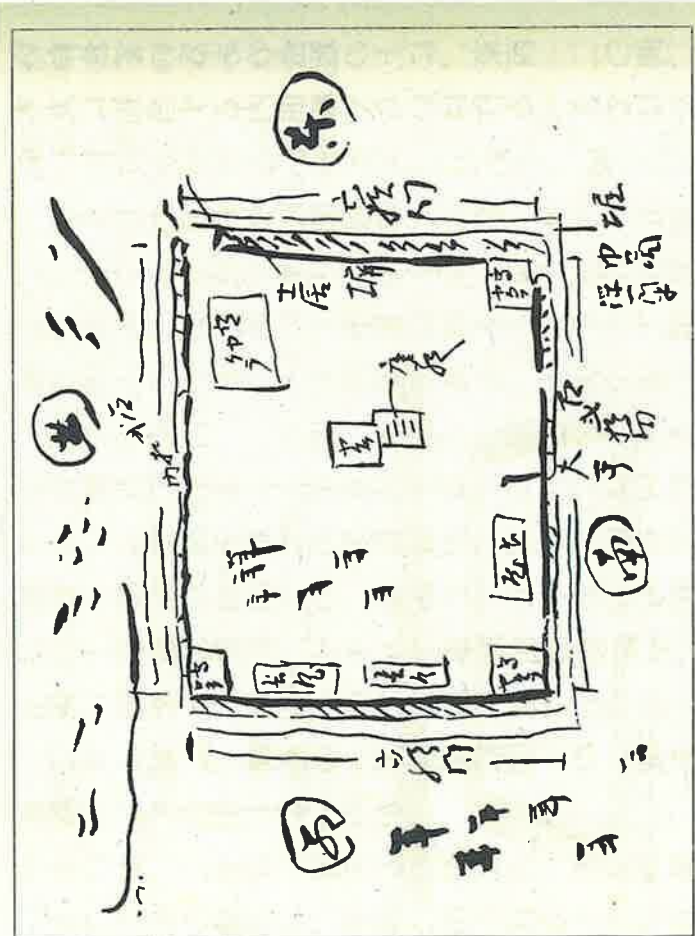
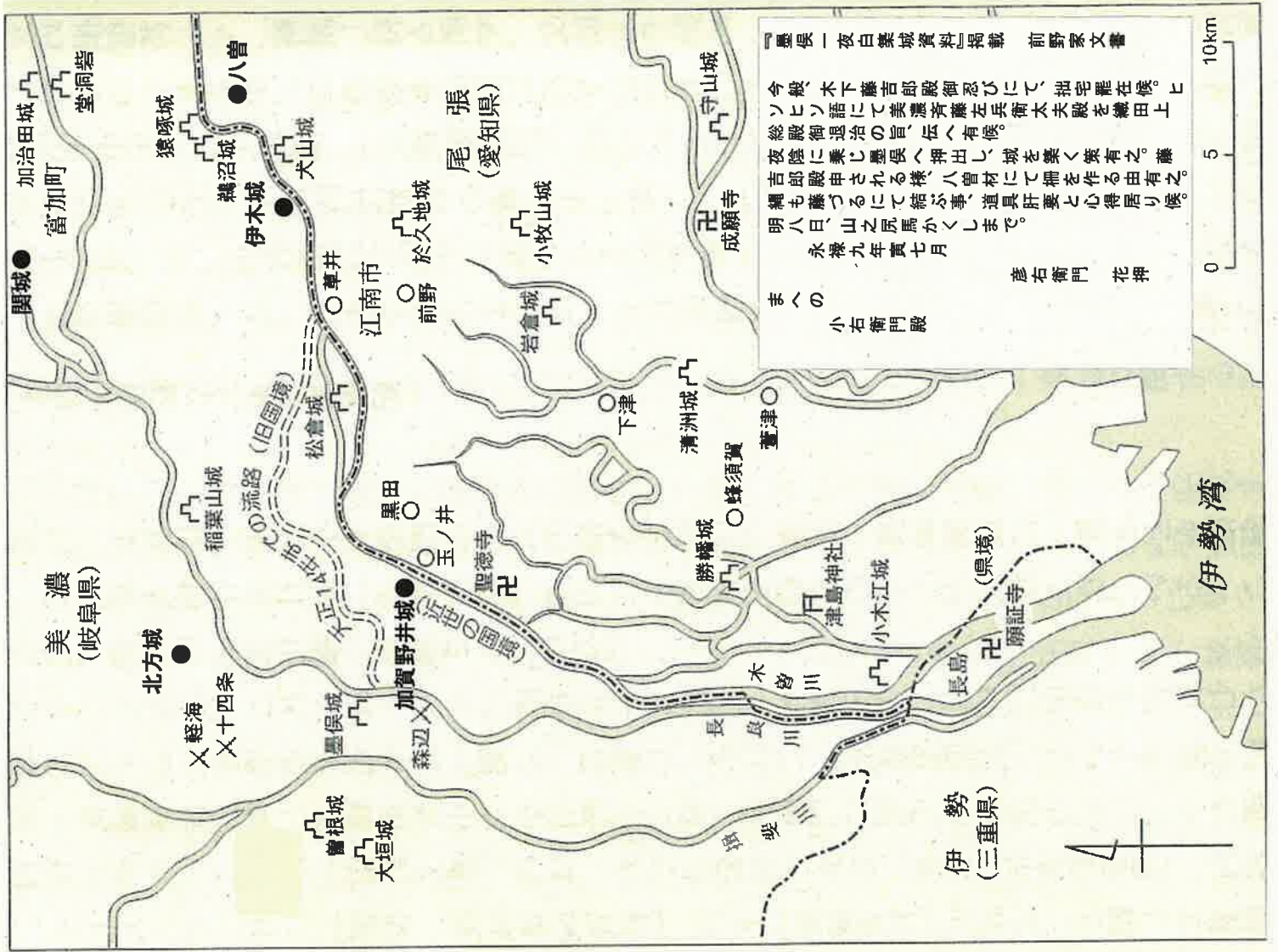
今川義元の懸頭も指てくづれ、破れけり。天文廿一年壬子五月十九日、旗本は定なり。是へ懸れと御下知あり。未刻更へ向てかゝり給ふ。初めは三百騎ばかり真丸になつて、義元を囲み退きけるが、二・三、四・五度縮し合せ、次第々々に無人になりて、後には五十騎ばかりになりたるなり。

信長も下立つて、若武者共に先を争ひ、つき伏せ、つき倒し、いらつたる若もの共、乱れかゝつてしきをけつり、鎧をわり、火花をちらし火槍をふらす。然りとていども、敵身方の武者、色は相まぎれず。爰にて御馬廻、御小姓衆塵々手負、死人負を知らず。服部小平太、義元にかゝりあひ、膝の口きられ倒伏す。毛利新介、義元を伐倒せ頸をとる。足備に先年清洲の城において、武衛様を悉く攻殺し候の時、御舎弟を一人捕り、助け申され候。其冥加忽ち来つて、義元の頸をとり給ふと人々聞候なり。運の尽きたる數にや。おけはさまと云ふ所は、はさまてみ、深田足入れ、高みひきみ茂り、節所と云ふ事限りなし。深田へ入る者は所をさらすはいづりまはるを、若者ども退付きく二・三つ宛手々に頸をとり持ち、御前へ参り候。頸は何れも背運にて御事候と仰出だされ、よしもの頸を御覽じ、御満足御めならず。もと御出で候運を御懸候なり。

奥野高広・岩沢愿彦校注『信長公記』(角川文庫 昭和四十六年)



『新説戦乱の日本史10 桶狭間の戦い』(小学館 二〇〇八年)より



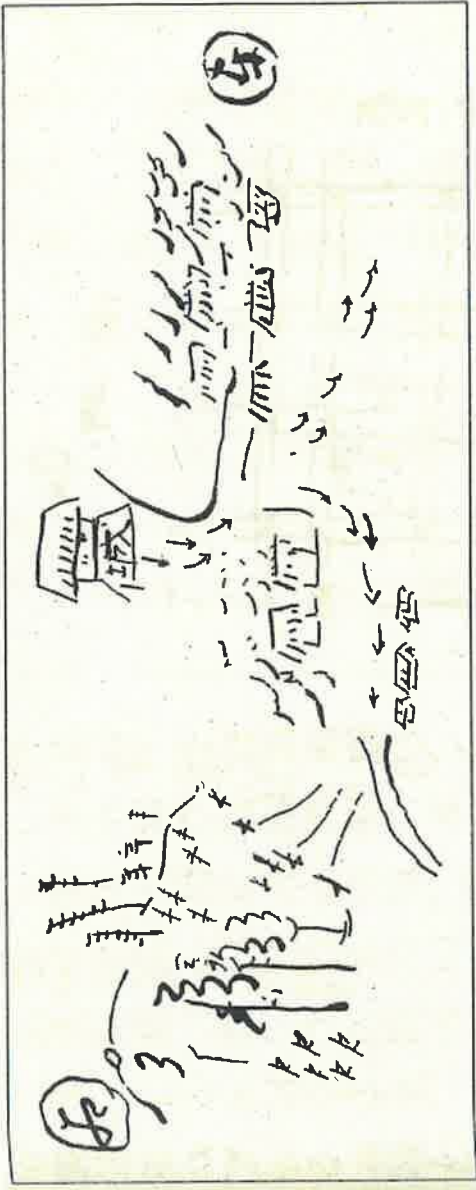
『永禄洲俣記』に描かれた墨俣一夜城

いずれも 藤本正行・鈴木真哉著『偽書『武功夜話』の研究』(洋泉社 二〇〇二年四月二十日)より転載。

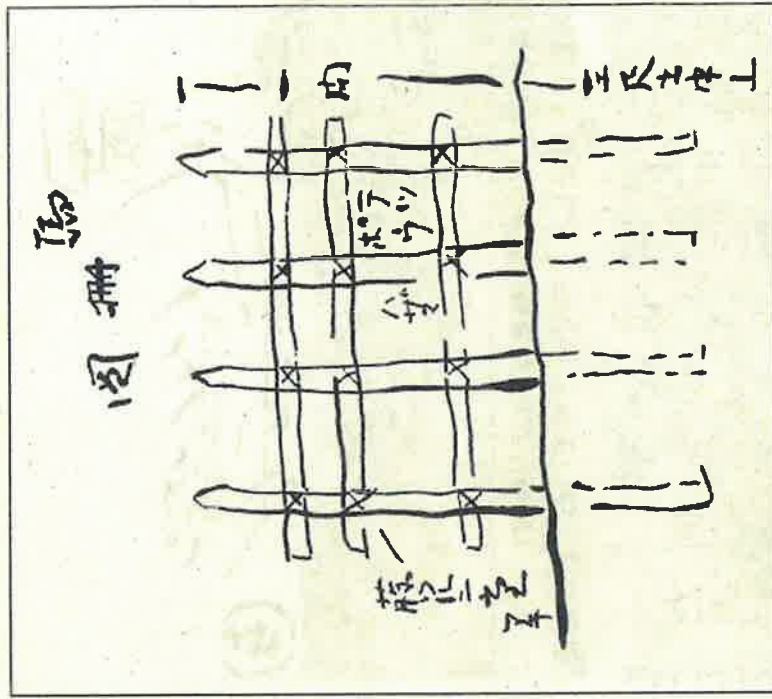


墨俣城模倣天守

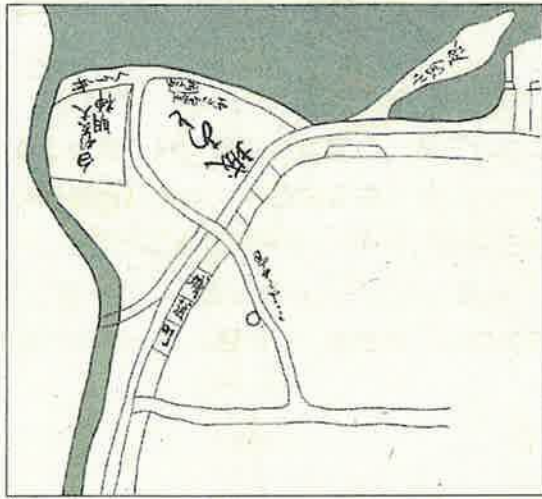
岐阜県大垣市墨俣町



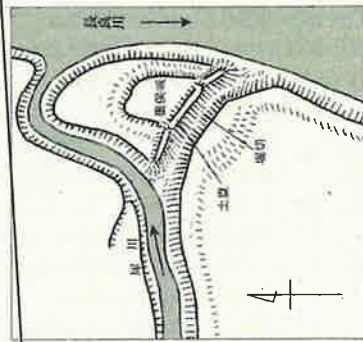
『永祿洲侯記』に描かれた墨俣一夜城下放火の図



『永祿洲侯記』に描かれた墨俣一夜城馬柵



墨俣城復元模式図



「墨俣宿絵図」にみる墨俣城

